

教員の教育相談の資質修得過程と教育相談の具体的工夫

春日 由美^{*1}・長谷 和久^{*1}・阿濱 茂樹^{*2}・池永亜由美^{*3}
大園 悦子^{*4}・河原 咲子^{*5}・来島 芳子^{*6}・宮田帆乃香^{*7}

Teachers' process of acquiring the qualities of educational consultation and specific innovations
in educational consultation

KASUGA Yumi^{*1}, NAGAYA Kazuhisa^{*1}, AHAMA Shigeki^{*2}, IKENAGA Ayumi^{*3},
OZONO Etsuko^{*4}, KAWAHARA Sakiko^{*5}, KIJIMA Yoshiko^{*6}, MIYATA Honoka^{*7}

(Received JULY 31, 2024)

キーワード：教員、教育相談の資質修得、教育相談の工夫

はじめに

近年、不登校やいじめ、暴力行為や児童虐待など、児童生徒を取り巻く課題は多様化・複雑化している。これらの課題への対応や予防的関わりも含む教育活動を教育相談といい、教育相談担当者に限らず、全教員が行うとされる。また、これらの課題は、児童生徒の将来に大きな影響を及ぼす可能性があり、教員には教育相談の力量が求められる。

この教育相談の力量形成のために、これまで第一筆者の実践研究を含め（春日，2022 など）、教育相談の研修に関する研究は散見されるが、各教育委員会や学校、養成大学においても、全教員や教員を目指す学生が教育相談の力を体系的に身につけるための体制ができているとは言い難い。そのため、現状では一人ひとりの教員が試行錯誤したり、先輩の姿や助言から学んだりなど、教育相談の力量形成は、個々の教員の経験や学ぶ姿勢に寄るところが少なくない。

このような現状から、これまで教員が教育相談の力量をどのように身につけてきたのか、また現在どのように教育相談を行っているのかを明らかにすることは、今後の教員の教育相談力の資質向上のために必要であると考えられる。

1. 本プロジェクトの目的と研究概要

本プロジェクトの目的は、教育相談の力量形成や教員が行う教育相談の現状を明らかにすることである。そこで方法として、教育相談力が高いと考えられる教員が、教育相談の資質をどのように身につけてきたか、また日々どのような工夫を行いながら教育相談的関わりや対応を行なっているのかについて、附属学校の教育相談力が高い教員を対象にインタビュー調査を行い、分析し、教育相談力を向上させるための知見を得ることとした。また今回、論文として成果報告を行うと同時に、研究成果を直接即時的に附属学校教員の教育相談力の向上に還元する目的で、研究結果の一部を記載した卓上カレンダーを作成することとした。

本プロジェクトの体制は表1の通りである。学部教員1名（春日）が総括や調査、学部での報告を行い、春日・長谷・阿濱の学部教員3名で、分析、考察、卓上カレンダー作成、報告資料作成を行った。学部教員から附属学校校長に、教育相談力が高くと考えられるインタビュー対象教員の推薦を依頼し、附属学校校長が1校につき1～2名のインタビュー対象者を推薦した。附属学校の教育相談担当教員は、各附属学校でのインタビュー調査の準備や、学部教員と共に分析の一部や卓上カレンダーの内容の検討、報告資料作成を行っ

*1 山口大学教育学部心理学選修 *2 山口大学教育学部技術教育選修 *3 山口大学教育学部附属山口小学校
*4 山口大学教育学部附属光中学校 *5 山口大学教育学部附属山口中学校
*6 山口市立二島小学校（前 山口大学教育学部附属特別支援学校） *7 山口大学教育学部附属光小学校

た。

また本プロジェクトでは、5つの附属学校の教育相談担当教員が研究メンバーとして参加している。これにより、附属学校の教員が心理学の研究方法を体験的に知る機会になることや、学校を超えた教育相談担当教員同士の「顔が見える」横の繋がりを作ることに寄与する可能性が期待された。

表1 プロジェクトの体制（令和5年度）

氏名	所属	役割
学部教員		
春日 由美	心理学選修	総括、調査、分析、考察、カレンダー作成、報告資料作成、報告
長谷 和久	心理学選修	分析、考察、カレンダー作成、報告資料作成
阿濱 茂樹	技術教育選修	分析、考察、カレンダー作成、報告資料作成
附属学校校長		
吉鶴 修	附属山口小学校	調査対象者推薦
前原 隆志	附属山口中学校	調査対象者推薦
岡田 淳子	附属光小中学校	調査対象者推薦
浅原 孝光	附属特別支援学校	調査対象者推薦
附属学校教育相談担当教員		
池永亜由美	附属山口小学校	調査準備、分析、カレンダー作成、報告資料作成
河原 咲子	附属山口中学校	調査準備、分析、カレンダー作成、報告資料作成
宮田帆乃香	附属光小学校	調査準備、分析、カレンダー作成、報告資料作成
大園 悦子	附属光中学校	調査準備、分析、カレンダー作成、報告資料作成
来島 芳子	附属特別支援学校	調査準備、分析、カレンダー作成、報告資料作成

1-1 調査方法

- 1) 対象者：附属学校の教員6名（小学校2名、中学校3名、特別支援学校1名。本プロジェクトの研究メンバーである教育相談担当教員は含まない）。
- 2) 方法：倫理的配慮について説明し、研究協力の同意を得られた場合に同意書への署名をもらった上で、半構造化面接を実施した。各対象者につき1回の調査を実施した。6名のインタビュー時間は合計540分（1名平均90分）であった。
- 3) インタビュー内容：教育相談の力量をどのように身につけてきたか、教育相談全般の工夫や大切にしていること、不登校・いじめ等困難課題での工夫、児童生徒・保護者・同僚との関わりの工夫、教育相談での失敗経験、について自由に話してもらった。

2. 定性的分析

2-1 分析方法

KJ法（川喜多，2017）を援用し、定性的分析を行った。インタビュー内容から、(1) 資質修得の過程、(2) 現在の教育相談における自身の在り方や考え、(3) 教育相談における他者との関係、の3つ内容に分かれると考えられたため、インタビュー内容をこれら3つに分けた上で分析を行った。

データ量が膨大であったため、データの一部を附属学校の教育相談担当教員と教育学部教員と対面で共に分類し、残りのデータを教育学部教員1名（春日）で分類した後に、附属の教育相談担当教員5名と教育学部教員2名（長谷・阿濱）が分類の妥当性について確認を行った。

2-2 結果

結果を表2～表4に示す。以下、大カテゴリーを【 】、中カテゴリーを[]、小カテゴリーを〈 〉と表記する。

表2のように、資質修得の過程では、【資質修得】として、[周囲の存在]（〈周囲からの教え〉等）や[子どもや保護者]（〈子どもを観察〉等）といった他者との関わりがあることが明らかになった。また[変わろうという気持ち]（〈自分で試行錯誤〉等）や[研修・書籍]（〈研修〉等）という自分自身の態度や学ぶ姿勢があること、[時間の経過]（〈自然に〉等）もあることが示された。また【きっかけ】として、[周囲の影響]（〈周囲からの教え〉等）や[子どもからのフィードバック]（〈子どもからのフィードバック〉）、[家族]（〈家族〉）といった他者の存在があることが示された。また[許容]（〈許容〉）や[経験]（〈上手くいかないことからの気づき〉等）といった経験の中での変化があることも明らかになった。【失敗】として、[心に残る失敗]（〈失敗を糧にする〉等）や[もがき]（〈もがき〉）といったネガティブな要因もあることが示された。

表2 資質修得の過程

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
資質習得	周囲の存在	周囲からの教え／周囲の影響／周囲に相談／周囲を見て学ぶ／学校の環境
	子どもや保護者	子どもを観察／子どもとの経験／保護者からの情報
	変わろうという気持ち	自分で試行錯誤／向上心／憧れ／先を見通す
	研修・書籍	研修／書籍
	時間の経過	自然に／経験
きっかけ	周囲の影響	周囲からの教え／周囲を見て／職場環境
	子どもからのフィードバック	子どもからのフィードバック
	家族	家族
	許容	許容
	経験	上手くいかないことからの気づき／年齢
失敗	心に残る失敗	失敗を糧にする／申し訳なき
	もがき	もがき

表3のように、現在の教育相談における自身の在り方や考えでは、【工夫】として、[具体的工夫]（〈子どもに聞く〉〈書き残す〉等）といった日々の具体的な課題における工夫のほか、[他者の仕事に手を貸す]（〈他者の仕事に手を貸す〉）という、いざという時に仕事を円滑に進めるための日頃の工夫も見られた。【大事だと思うこと】として、[教育相談への考え]（〈理念を伝える〉〈授業と生徒指導の基本は同じ〉等）や[仕事が好き]（〈仕事が好き〉）といった日頃考えていることや感じていること、[熟考し予防につなげる]（〈考え続ける〉〈素直に反省〉等）や[先輩から引き継ぐ]（〈先輩から引き継ぐ〉）、[学校を担う経験をする]（〈学校を担う経験をする〉）や[的確な言葉を返す]（〈的確な言葉を返す〉）といった具体的に重視していることが示された。【ストレス】として、[切り替え]（〈自分なりの切り替え〉等）や[前向き]（〈前向き〉）といったストレスをためすぎないようにしているカテゴリーがある一方で、[休日の気がかり]（〈休日の気がかり〉）や[頭と体のズレ]（〈頭と体のズレ〉）といったストレスを抱えているカテゴリーも見られた。【不登校】として、[本人・保護者への対応]（〈本人・保護者との早期の関わり〉等）といった当事者への対応のほか、[保護者との関わり]（〈保護者との関係づくり〉等）や[他の子どもとの共有]（〈他の子どもとの共有〉）、[チームでの検討]（〈チームでの検討〉）といった周囲の人間との関わりも示された。加えて[正解のなさ]（〈正解のなさ〉）という捉え方も示された。

表4のように、教育相談における他者との関わりでは、【児童生徒】として、[子どもとの関わり]（〈日頃の関わり〉〈関わりの工夫〉等）や[集団作り]（〈暖かい雰囲気・良いことの共有〉等）といった個別の児童生徒や集団における工夫や、[関わるために大切にすること]（〈引継ぎ・情報を大切にすること〉等）など対同僚や時期について重視すること、[自分の態度]（〈伝え方〉等）や[子どもに関わる意欲や熱意]（〈子どもに関わる意欲や熱意〉）といった子どもに対する自分に関するカテゴリーが見られた。【保護者】として、[関りで大切にすること]（〈とにかく聴く〉等）や[良好な関係の工夫]（〈つながる工夫〉等）、[連絡のタイミング]（〈連絡のタイミング〉）といった保護者と関わる際の細かな工夫があることが明らかになった。

表3 現在の教育相談における自身の在り方や考え

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
工夫	具体的工夫	子どもに聞く／同僚に聞く／書き残す／観察する
	他者の仕事に手を貸す	他者の仕事に手を貸す
大事だと思うこと	教育相談への考え	理念を伝える／理念を持つ／授業と生徒指導の基本は同じ
	仕事が好き	仕事が好き
	熟考し予防につなげる	考え続ける／素直に反省／超未然予防
	先輩から引き継ぐ	先輩から引き継ぐ
	学校を担う経験	学校を担う経験
ストレス	的確な言葉を返す	的確な言葉を返す
	切り替え	自分なりの切り替え／吐き出す／休日の切り替え／あきらめ／ためない
	前向き	前向き
	休日の気がかり	休日の気がかり
不登校	頭と体のズレ	頭と体のズレ
	本人・保護者への対応	本人・保護者との早期の関わり／つながりの継続／子どもとの丁寧なやり取り／子ども中心／背中を押す
	保護者との関わり	保護者との関係作り／保護者のサポート
	他の子どもとの共有	他の子どもとの共有
	チームでの検討	チームでの検討
	正解のなさ	正解のなさ

注) いじめのみに特化した内容はなかった。

表4 教育相談における他者との関係

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
児童生徒	子どもとの関り	日頃の関わり／関わりの工夫／子どもの意見を尊重／子どもへの見方／個々の子ども・状況に合わせる／女子との関係作り
	集団作り	暖かい雰囲気・良いことの共有／他の子とつなぐ
	関わるために大切にすること	引継ぎ・情報を大切にすること／年度初め・行事を大切にすること
	自分の態度	伝え方／自己開示・正直さ／厳格さ・明確さ
	子どもに関わる意欲や熱意	子どもに関わる意欲や熱意
保護者	関わりで大切にすること	とにかく聴く／聞き方の工夫／思いを組んで信頼関係を作る／一緒に考える／保護者の意向を大切にすること／大事な時は直接会う／謝る大切さ／伝える必要性
	良好な関係の工夫	つながる工夫／子ども・保護者・教員関係
	連絡のタイミング	連絡のタイミング
	慎重さが必要な保護者	慎重さが必要な保護者
	年齢の難しさ	年齢の難しさ
	他者へつなぐ	他者へつなぐ
	面接時の他者のサポート	面接時の他者のサポート
同僚	つながりの重視	情報共有の大切さ／日常のコミュニケーション／思いを伝える
	連携	小中連携／引継ぎの大切さ／仕事での共同
	相互サポート	同僚へのサポート／同僚からのサポート
	子どもへの影響	子どもへの影響

また、「慎重さが必要な保護者」(〈慎重さが必要な保護者〉)や「年齢の難しさ」(〈年齢の難しさ〉)といった特定の対象や現実的状况についてのカテゴリーが見られた。また「他者へつなぐ」(〈他者へつなぐ〉)や「面接時の他者のサポート」(〈面接時の他者のサポート〉)といった他者との連携や被支援のカテゴリーがあることが示された。【同僚】として、「つながりの重視」(〈情報共有の大切さ〉等)や「連携」(〈連携〉等)、「相互サポート」(〈同僚へのサポート〉等)といった同僚との相互の関係が示された。くわえて「子どもへの影響」(〈子どもへの影響〉)といった教員同士の関係の子どもへ影響についてのカテゴリーも見られた。

2-3 考察

分析結果、教育相談の資質の修得過程では、他者の要因と、変わろうという態度や姿勢といった教員自身の要因が重要であると考えられた。そのため、今後教育相談の資質向上の方策を考える際には、周囲の他者と教員自身の双方の視点から検討することが重要であると考えられる。

また、現在教育相談力が高いと考えられる教員も、初めから児童生徒への関りが上手くできたのではなく、経験の中で変化したり、失敗経験なども経ていることが明らかになった。このことから、教育相談の資質を身につける上で、失敗しないことや思い悩まないことが良いとも言い切れず、他者の力も借りながら、自分の様々な経験を日々振り返ることが重要であることが示唆された。

そして、教育相談力の高い教員は、日々具体的な課題における工夫や、仕事を円滑に進める工夫を考え実行していたり、教育相談について日頃から自分なりに考え続けていることが明らかになった。つまり、教育相談力を高めるためには、一度研修を受けたら資質が身につくのではなく、児童生徒との実践の中で、教員自身が考え続けたり、工夫し続けることが必要であることが示されたと言える。またその際に、個別の児童生徒、集団、保護者、同僚、児童生徒や保護者に対する自分自身など、他者や自分に対して細やかに考えることが必要であろう。

更に、教育相談力の高い教員であっても、ストレスを抱えていたり、切り替えが上手くできなかつたり、過去の失敗経験にもがいていることが示されたり、不登校対応の正解のなさも感じていることも明らかになった。このことから、新任教員や、経験があっても現在教育相談に自信がない教員に対して、経験を積んだ資質能力の高い教員であっても、思い悩んだり、上手くストレスに対処できないこともあるのだということ伝えることは、新任教員や自信がない教員が過度に気負いすぎたり、完璧を求めようとすることを予防することに繋がる可能性も考えられる。

3. 定量的分析

3-1 分析方法

インタビューの文章の特徴を定量的に分析するため、NTTデータ数理システムのText Mining Studio (Ver. 7.1.2)を用いてテキストマイニング分析を行った。「2. 定性的分析」の結果から、教育相談を行ったり、資質を修得する過程で、自分や他者をどのように捉えているかが重要と考えられたため、人に関する単語に注目することとした。

まず、「単語頻度分析」機能を用い、名詞の出現が多い上位10件を抽出した。そのうち、人に関する単語の出現頻度の高い単語について「評判抽出」機能を用い、それらの単語に係り受けするポジティブ・ネガティブな単語の頻度を分析した。

3-2 結果

インタビューの文章の基本統計量は、総行数607、平均行長164.2文字、総文章数2051、延べ単語数20,231であった。

「単語頻度分析」機能により、人に関する単語の出現頻度の高い単語を抽出したところ、上位5つとして、「子ども」「自分」「先生」「保護者」「先輩」があった(図1)。「評判抽出」機能により、これらの単語と係り受けするポジティブ・ネガティブな単語の頻度を分析した。その結果、いずれの人に関する単語においても、ポジティブな文章が多かった(図2)。

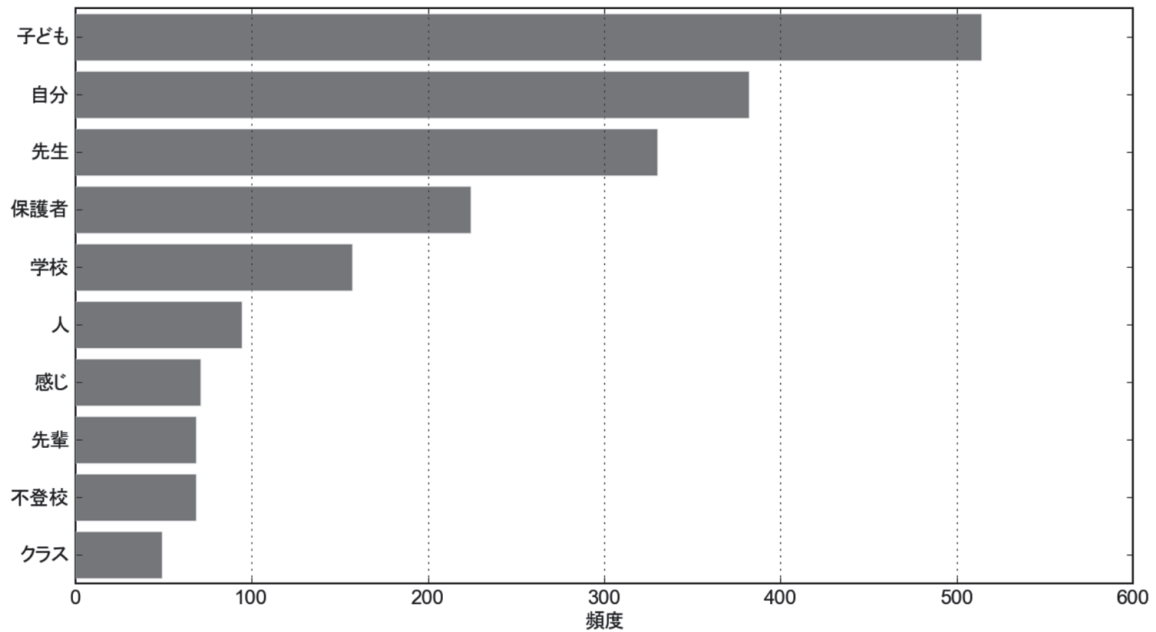


図1 出現が多い名詞

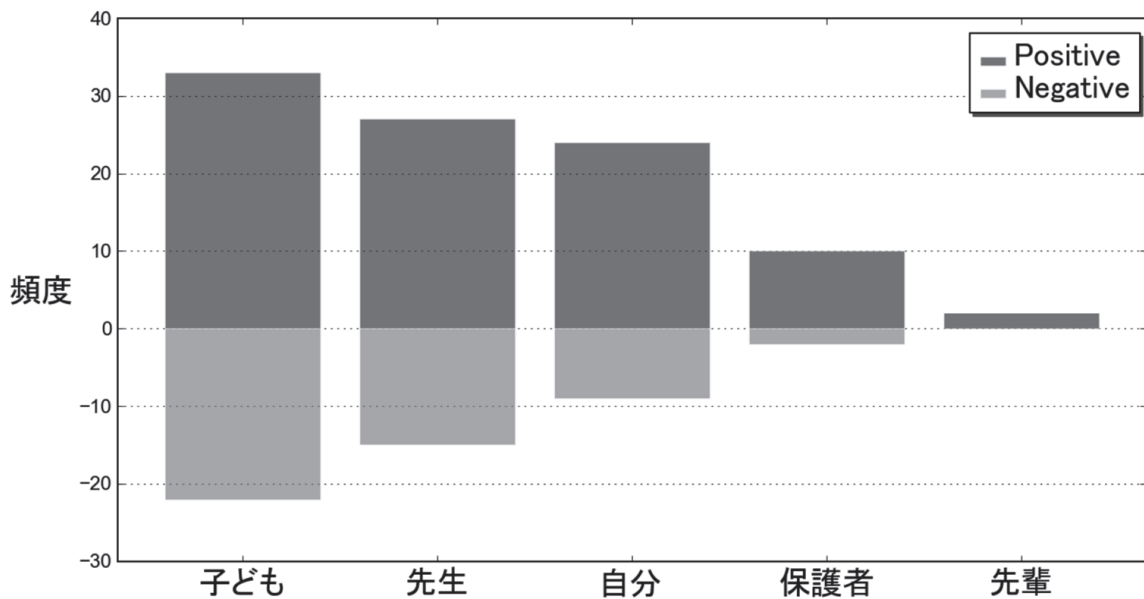


図2 人に関する評判抽出 (ポジティブ・ネガティブな単語数)

3-3 考察

分析の結果、教育相談力の高い教員は、教育相談に関して、他者に対しても、自分に対しても、ポジティブな捉え方をしやすいことが考えられた。特に、「保護者」や「先輩」と係り受けする単語はポジティブな単語が多く、「保護者」の単語と同時に用いられたポジティブな単語を含む文章を参照すると、「(スクールカウンセラーに) つなぐと、「保護者の方もなんか話して良かったとか、(中略)頼れる場所を1つ増やすというのも必要なと」等があり、保護者がポジティブになるような関わりをしようとしていることが考えられた。また、「先輩」の単語と同時に用いられたポジティブな単語を含む文章を参照すると、「先輩すごいですね」等があり、先輩と良い関係を築いてきたことが推察される。また「子ども」に対しては、ポジティブな単語が多いが、ネガティブな単語も少なくなく、原文を参照すると、「いいことも悪いことも、他のクラスのこの子のことも、先生たち見てるんだよみたいなのを、すごくこう(子ども達に)伝わるようにしてたような気がするんです」等があり、ポジティブ・ネガティブの両面から捉えている可能性が考えられた。また、

教育相談力の修得② 変わろうという姿勢

- ・教育相談の力量形成には、先生自身が**変わろうという姿勢**を持たれることも大切なようでした。
- ・他の先生への憧れについては、自分より若い先生に対しても、「ああいうのはいいなあ、真似したい」と言われていたのが印象的でした。



試行錯誤

「わりと柔軟に、なんかちょっとおかしいから少し変えようみたいな」「いろんな意見と自分の考えとを上手に選択しながら」「いろいろ登校に繋げるためにいろんな可能性を探ってた」「試行錯誤して、変えて、この子にあった指導方法を見つけたり」

向上心

「(先輩の教えを)受け取って、何とかしたいという思いが強かった」「子供のためとか、学校を中心になるんだっていう先生の方が、そういう力は身についていくなと思ってます」

憧れ

「先輩が、すごくクラスで雑談として話すような先生で、そういうのがいいなあって思ってたと思います。見ててちょっとやってみようって」「ああいうこと言えるのはすごいなっていう先生もおられるし、ああいうの見た時に、ああいう言葉がけもできるようになったらいいなあ」と

図4 カレンダー裏面(7月)

おわりに

今回のプロジェクトの意義として、以下の4点が挙げられる。

1つ目は、教育相談における具体的工夫や、それらを身につける過程に、どのような要素があるか予備的検討を行うことができたことがある。これまで教育相談の資質形成について、各自治体の教育センターや教員養成の大学においても十分に検討されたり、整備されたりしてきたとは言い難い。今回のような研究成果をもとに、今後教育センターや大学において、全教員や教員を目指す学生が十分に教育相談の資質を形成するための体制を整えていくことが望まれる。

2つ目として、テキストマイニングを用いて、定性的データを定量的に分析したことがある。今回、教育相談力の高い教員が、他者にも自己にもポジティブな捉え方をしやすい可能性を示すことなど、定性的分析では得ることが難しい結果を得ることができたことが挙げられる。今後さらに教育相談を含め、教員の資質形成やその向上について検討する際に、今回のような定性的データをもとに定量的分析を行うことで、これまで気づかれなかった側面を明らかにすることができることが期待できる可能性が考えられる。

3つ目として、研究成果を基に卓上カレンダーを制作したことがある。このようなプロジェクトや研究では、成果物として報告書が作成されることも少なくないが、研究成果を一部ではあるが、普段から人目につきやすいカレンダーに記載したことで、多くの教員が普段繰り返し目にするのが可能となり、研究と実践を繋げる一方法の提案となったと考えられる。

4つ目として、附属学校の教育相談担当教員同士の交流促進につながった可能性がある。附属学校5校の教育相談担当教員を共同研究者とし、分析を共に行ったことで、普段顔を合わせる事が少ない教育相談担当教員同士の交流促進にもなったことが考えられ、今後教育相談等での情報共有や協力が促進される可能性が期待される。

本プロジェクトでは、特に研究と教育実践の往還を意識した。研究テーマは教育相談といった、現代の学校現場で教員が悩むことが少なくない側面についてである。卓上カレンダーを作成し、研究成果をそのまま現場の全教員に還元・共有し、研究成果と教育実践が即時的につながるように工夫した。また、今回、校種や学校を越えた現職教員が共に研究を行うことで、プロジェクトの期間のみでなく、その後の教育実践にお

ける協働にもつながることも期待した。今後さらに今回のプロジェクトのように、研究成果が即時的に現場で役立つような、また一部の教員でなくできるだけ全教員と研究成果を共有できるような研究や成果公開が行われたり、その後の教育実践にもつながるような、研究と実践がつながる研究が行われることが望まれる。

付記

研究協力を快く応じてくださった各附属学校校長、インタビューに快く応じてくださった附属学校の先生方に心より感謝申し上げます。本稿は、山口大学教育学部附属教育実践総合センター「2023年度学部・附属共同プロジェクト」採択の「教育相談における具体的工夫の概念化の試み」の成果の一部をまとめたものです。

論文化に際し、第1著者が全体をまとめ、第2著者～第7著者が全体の確認と修正を行った。

引用文献

春日由美 (2022) : 「ワークを用いた教員の教育相談に関する継続研修の検討 : 自己理解と他者理解を中心として」, 『臨床心理学』, 22 (6), 749-758.